

聖書：マタイ 22：34～40

説教題：一番重要な戒め

日時：2020年4月19日（朝拝）

今日の箇所でもたパリサイ人たちが土俵に上がって来ます。彼らは前々回の箇所で、カエサルへの納税問題でイエス様に挑戦し、見事に退けられました。それで入れ替わるようにしてサドカイ人らが挑戦しましたが、彼らもまた完敗しました。パリサイ人たちはこれを見て内心喜んだと思います。自分たちだけ面目を失うことは避けられました。しかしだからと言ってイエス様を勝たせたままにしておくことはできない。そこで彼らはもう一度挑戦したというのが今日の箇所です。彼らは一緒に集まって相談し、その中の一人の律法の専門家がイエス様に質問します。35節に「試そうとして」と書かれていますが、これは罠にかけるためということです。悪意からということです。しかしこの悪意から出た質問によって、尊い教えがイエス様によって語られることとなります。

その問いとはこのようなものでした。36節：「先生、律法の中でどの戒めが一番重要ですか。」これはユダヤ人の中で長らく議論されて来た問いでした。律法はどれも神の戒めですから軽んじて良いものは一つもありません。しかし戒めの中には、より重いものがあるという見方は正当なものと言えます。たとえば「殺してはならない」という教えと「子やぎをその母の乳で煮てはならない」という戒めは重さが同じとは言えません。やはり人を殺す罪の方がはるかに重大です。ですから戒めの中でどれが一番重いのか、どれが一番重要なのかという問いは、多くのユダヤ人にとって、また学者たちにとって大きな関心事でした。そしてそこには色々な意見の違いがありました。ですからこのような質問をイエス様にぶつければ、どんな答えをしても必ず反対者が出ます。その結果、イエス様はある人々からは人気を失うこととなります。イエス様はこれに何と答えられたのでしょうか。

まずイエス様はこう言われました。37～38節：「イエスは彼に言われた。『あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。』これが、重要な第一の戒めです。」イエス様が言われた第一に重要な戒め、それは神との関係における戒めでした。人間生活で一番大事なのは神との縦の関係、いわば垂直的關係における事柄であるとイエス様は示されました。具体的にイエス様がここで引用されたのは申命記6章5節です。直前の4節は「聞け、イスラエルよ」という言葉で始まってい

て、この最初の「聞け」という言葉、ヘブル語の「シェマ」という言葉をもって、この部分全体が呼ばれていました。そして会堂での礼拝のたびごとに唱えられていました。そのユダヤ人たちが良く知っている御言葉の中の5節を取り上げて、イエス様はこれが一番重要な戒めであると回答されたのです。注目すべきはここで「愛」が大事であると言われていることです。律法あるいは戒めと言うと、私たちは従うもの、守るものというイメージを持つかもしれませんが。ですからこの5節も「あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、力を尽くして、あなたの神、主に従いなさい」とか、「主に仕えなさい」と語られてもおかしくなかった。実際、ここの前後はそういう言葉で満ちています。1節を見ると、その最後に、「それらを行うようにするためである」と「行う」ことが命じられています。2節でも「主の掟と命令を守るため」と「守る」ことの大切さが述べられています。3節にも「聞いて守り行いなさい」と言われています。ところがイエス様が最も重要な戒めとして取り上げた5節では「主を愛しなさい」と命じられています。ここに戒めは「愛」との関係で考えられなければならないことが示されています。律法は「主を愛する心」から行われなければならないということです。

これは確かにそうです。神の立場から考えて、私たちが戒めを守っても、嫌々ながらそれをしたらどうでしょうか。単なる義務感から文句を言いながらしたらどうでしょう。私たちの人間関係でも、誰かが何かをしてくれても、陰でぶつぶつ言いながらしていたら何も嬉しくありません。ぶすっとした顔で、やればいいんでしょという態度で行うなら、何の良いこともありません。そうではなく喜んで、自発的にそれをしてくれることを望みます。神も同じでしょう。強いられてでなく自由な心から、神への愛によってすること。これが最も大事なことだとイエス様は言われました。

さらに「心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くして」と言われています。一つ一つの言葉の違いについて思い巡らすことは意味のあることとは思いますが、これらを細かく区別することにここで関心があるわけではありません。これはその人の全存在をもって、あるいは全人格をもってという意味です。その動機も、その感情も、その思想も含めたすべてをもって、まさに全身全霊をもってということです。しかしこれを言うのは簡単ですが、果たして現実にはどうでしょう。これは重く響いてくる言葉でもあるのではないのでしょうか。自分は全身全霊をもって神を愛するなどという生活はとてできていない。そもそもそういう生き方は自分に可能なのだろうか。この御言葉の前に、いつも私はそれができていないことを示されて責められるだけではないだろうか。これに

については後で考えたいと思います。

さてイエス様はもう一つのことでも述べられました。質問した人は、どの戒めが一番重要かと一つの答えを要求しましたが、イエス様は2つ答えました。これはこの二つはセットであり、切り離して考えられないことを示しています。39節：『あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい』という第二の戒めも、それと同じように重要です。」イエス様はここで隣人愛に関するレビ記19章18節を引用されました。ここから私たちは神への愛という垂直的關係は、隣人への愛という横の關係、水平的關係にも現れなければならないという真理を教えられます。私たちは何よりも神を愛すべきです。しかし神はご自身のかたちに造った人間すべてを愛しておられます。ですから私たちが真に神を愛するなら、その神が大事にしている人間を、神が愛しておられるように愛するはずで、神への熱心を示しつつ、人々を大事にしないのは違うということをとたとえばIヨハネ4章20節が次のように語っています。「神を愛すると言いながら兄弟を憎んでいるなら、その人は偽り者です。目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません。」

そしてこの隣人愛の戒めには、その愛し方について「自分自身のように」という言葉が付けられています。これはどういう意味でしょうか。しばらく前の時代には、隣人を愛するにはまず自分自身を良く愛していなければならない。だからここには「神を愛せよ」、「隣人を愛せよ」の他に「自分自身を愛せよ」という第3の命令があるというメッセージが流行したことがあって、最初に聞いた時はびっくりしたものです。しかしここで自分を愛することが勧められているわけではありません。私たちは本能的に自分を大事にします。自分を愛しています。そして正しい意味での自己愛はあります。それと同じように！とここで言われているだけです。私たちは自分のためには何でもするのに、他人のこととなると突然淡白になります。自分のためにはどんな犠牲や労力も厭わないのに、他の人のためとなると全くやる気がなくなります。そういう自己愛を前提にして、自分を愛するのと同じように！と言われているわけです。しかしこれもよく耳を傾けると悲鳴をあげたくなる言葉ではないでしょうか。一体誰にそんなことができるだろう。本当にこんなことが人間に可能なのか。絶対に無理な教えではないのか、と思わされます。途方に暮れてしまいそうになります。しかしこれが第一の戒めと表裏一体の重要な戒めであるとイエス様は言われました。

そして最後 40 節でこう述べられました。「この二つの戒めに律法と預言者の全体がかかっているのです。」 「律法と預言者」という言葉で、イエス様は旧約聖書全体を指しています。旧約聖書のエッセンスがこの二つの戒めになるということです。神を愛し、人を愛することが聖書のメッセージの要約である。この意味は、この二つさえ覚えておけば後は要らないとか、他の戒めは忘れてもいいということではありません。神への愛と隣人への愛の具体的な実践として様々な戒めがあります。ですから私たちにとって大切なことは、すべての聖書の命令をこの「神を愛し、人を愛する」という中心原理に沿って考えることです。この根本精神を常に見失わないようにすること。そしてこれに沿って一つ一つの戒めを考え、実行することが大事であるということです。

さて以上のように「愛」が大事なことを私たちは学んで来ました。神への愛が律法を守る生活に先立っていなければならない。私たちは自分を振り返ってどうでしょうか。神を愛して信仰生活を送っているでしょうか。神への愛によって戒めを守る生活をしているでしょうか。もしかするとそこから程遠い自分であることを思われるかもしれません。しかも「心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くして」とまで言われています。このような生き方はこの私には到底不可能なことに思われる。神への愛が大事であるとしたら、私たちはどうやってこの神への愛を豊かに持つ人になれるのでしょうか。その秘訣として聖書が示していることは、私たちの神への愛よりも、神の私たちに対する愛が先立つということです。Ⅰヨハネ 4 章 19 節：「私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださったからです。」 「私たちの愛」は「神の私たちに対する愛」への応答です。ですから私たちは神が私を愛してくださっていることを信じなければ神を愛せない。神は私を愛しておられるという確信が大事です。しかし私たちはそのことを信じているでしょうか。教理としては知っているでしょうけれども、神は私を愛していると本当に感じ、また感謝しているでしょうか。これに関して助けになったのはジェリー・ブリッジズが書いた本で、日本長老教会文書出版委員会によって日本語にも訳された「恵みに生きる訓練」という本です。その第 7 章はまさにこの問題を扱っていて、そこで著者はチャールズ・ホッジという有名な神学者の注解書を引用しています。そこにこういうことが書いてあります。多くのクリスチャンにとって非常に困難なことは、キリストが（あるいは神が）自分たちを愛しているということについて自分たちを説得できないことである。どうして神の愛を確信できないかという、自分たちは神の愛を受けるに値しないことを彼らは良く知っているからである。反対に自分たちは最も愛らしくない者たちである。無限に聖い神がどうして罪に汚れた者を愛することができ

ようか。また高慢な者、自己中心な者、いつも不満な者、感謝しない者、従う生活をしていない者を。これが本当に信じるのが難しいことであると。私たちはそのように考え、こんな私を神が愛してくださるはずがないと確信しやすい。愛するどころか、神は私に怒っておられる。やがての日には私の一つ一つの罪を明らかにしてさばきを下されると考えている。ブリッジズは他の人の言葉を引用しながら、人間は自分に対して敵対する人や恐ろしいと感じる人を「愛する」ことはできないように造られていると言います。私たちは自分が神の怒りや罪の責めの下にあると考えている間は神を愛する生活はできないのです。どうしたら良いでしょう。

その方法は、自分を責める罪を十字架のキリストのもとへ持って行くことです。キリストのきよめてくださる血の注ぎかけを受けることです。神は私たちの救いのために御子を送ってくださいました。その御子のもとで罪の赦しを受ける時、私たちは良心の咎めから解放されます。ヘブル人への手紙9章14節：「まして、キリストが傷のないご自分を、とこしえの御霊によって神にお献げになったその血は、どれだけ私たちの良心をきよめて死んだ行いから離れさせ、生ける神に仕える者にすることでしょうか。」そして自分の罪が赦されるという体験をする時、私たちの心には必ず神への愛が沸き起こって来ます。ルカの福音書7章47節で、イエス様は「多くの罪を赦された人は、多く愛する」と言っています。ここにイエス様を、また神様を多く愛する者となるための秘訣があります。それは多く赦されることです。どんなに自分の罪がひどくても、その罪をイエス様のもとに持って行くなら、その罪はイエス様の十字架を通して赦されます。その赦された罪が大きければ大きいほど、その人はより多く主を愛する者となる。こんな自分の罪など決して赦されないと深く悩んでいる人こそ、キリストのもとで赦しを受けるなら、その人の前には心から神を愛する歩み、全身全霊をもって神を愛する歩みが開かれるのです。もちろんそのようにしても私たちはまた罪を犯します。それでも日々主の十字架のもとに行くのです。そのようにし続けるところに益々主を愛し、神をする歩みが開かれて行くことになるのです。

そして「愛」によって生きる時、私たちの世界は変わります。愛する人のためなら、あるいは愛するもののためなら、私たちは喜んで犠牲を払います。苦労も苦労でなくなります。したいからそれをするという生活になります。まさに「心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くして」生きる者となる。そしてそれが喜びとなるのです。旧約聖書にヤコブという人が出て来ます。彼は兄のエサウから逃れるため、叔父のラバンのもと

へ逃れましたが、そこで出会ったラケルと結婚するために、7年間ラバンに仕えました。その時の彼について創世記 29 章 20 節はこう記しています。「ヤコブはラケルのために七年間仕えた。ヤコブは彼女を愛していたので、それもほんの数日のように思われた。」あの賢いラバンのもと、7年間も働くことは実際には大変なことだったと思いますが、ヤコブにはそれはほんの数日のようではなかったと言います。なぜでしょうか。それはヤコブが彼女を愛していたからです。愛は私たちに新しい見方、新しい動機、新しい力を与えて、その人を全く新しい世界に生かすのです。パウロもそうでした。なぜ彼はあのように主のためにその生涯をささげる歩みができたのでしょうか。Ⅱコリント 5 章 14 節：「というのは、キリストの愛が私たちを捕らえているからです。」彼の原動力は、キリストの愛であり、またキリストへの愛であった。人は愛に支配され、愛に駆り立てられた時、あのように生きることができた。私たちも原則は同じだと思います。神への愛に駆り立てられるなら、私たちは喜んで神に仕えようとし、神への感謝と愛の思いに導かれて神に喜ばれる歩みをしたい。神が命じておられるあらゆる戒めを守り行う生活をしたいと願うようになる。まさに私たちの全存在をささげての生活です。地上にある間、それは完全なものとはならないかもしれませんが。しかし神の前にそれは真実なものであり、神はそれを喜んで受け取ってください。私たちは今日のイエス様の言葉を受けて、改めて「愛」によって生きることの重要性を覚えさせられたいと思います。私たちは神を愛して歩んでいるでしょうか。またその神への愛に基づいて周りの人々を愛して歩んでいるでしょうか。神が遣わしてくださった御子のところへ行き、その十字架による罪の赦しを経験することを通して、私たちは神を愛する歩みを導かれるようになる。私たちはこの神への愛によって、神の御前にあるすべての歩みをささげる者とされたいと思います。そうして喜びをもって神の命令を守り行い、神の律法を全うする者へ、また神に益々似る者とされる救いの祝福に歩む者へ導かれて行きたいと思ひます。